

## 文化祭について

本校最初の文化祭は、戦後の学制改革により本校が「本荘高等学校」となった昭和23年（1948年）10月15、16日に開催されました。「八十年史」「百年史」には「バザーとか学芸会のような催しは女学生のやることで中学生（男子）には縁のないことであった」とあるので、旧制中学校時代には開催されていなかったようです。終戦から3年、平和国家・文化国家としての再生を図る日本全体の流れも文化祭開催の一因であったといえます。

この年に発刊された学校新聞「玲瓏」には初の文化祭の予告として

「その内容は演劇、合唱、万才、落語、手品、英語演説、朗読等多彩なプログラムで埋められている。特に期待されているのは演劇で全学生の関心を集めている。前人気を集めているこの文化祭の当日は画展、工作展も行う。（中略）十五日は全校生徒に見せ十六日は町民に公開する。」（「玲瓏」第二号）

「脚色、演出から、音楽・舞台装置・出演者に至る迄、みな学生の手によるもので、現代学生の智と情熱で築いた豪華版である。」（「玲瓏」第三号）

とあり、「自分たちの手で！」という意気込みが伝わってきます。当時は演劇部はまだなく、すべてクラス単位で上演されるものでした。当時の音楽教師の附家敬二郎先生が第一回文化祭の約一ヶ月後に発行された「玲瓏」第四号に次のような文章を寄せています。

「秋の夜更け、肌寒いと思ったらもう二時だった。ガランとした講堂では一年の演劇の稽古が又初めからやり直しである。宿直室で三東（※注…三年東組）の出演者達が疲れ切ったのゴロ寝である。これが文化祭前夜の風景であった。まことに本校文化祭は出演者の異常な努力と熱情で開幕された。その結果は、一言にして『良かった』といたい。」

附家先生も生徒達の練習を夜通し見守っていたということになります。初めての文化祭にかける生徒達の情熱も熱ければ、それを後押しする先生方もまた「熱かった」わけです。「八十年史」には第1回文化祭の最上級生のプログラムが掲載されており、演劇の他に「ハワイアンギター」「マンドリン合奏」「詩吟」「剣舞」といった現在ではお目にかかれなような内容も確認することができます。

初めの頃は終戦からまだ間もないため電力事情も悪く、文化祭中に突然停電する可能性もあったそうです。昭和26年の思い出として、当時生徒会顧問であった江幡勝一郎先生が「八十年史」で次のような逸話を紹介しています。

「（前略）電力会社に時間を限ってストップしないよう懇願これつとめなければ、と思い悩んでいる私を尻目に生徒会の役員、中央委員たちはいっせいに外に散って行ってしまった。それから何十分、何時間後だったのだろうか、彼らは汗みどろになりながら意気揚々として、何個ものトラックのバッテリーを運びこんできたのである、運送会社を頼み込み押し倒して予備バッテリーのありったけを借りてきたのである。私は彼等の知恵と押しにあきれると共に敬意を表し、又よろこんで借用書を書きハンコをおした。（後略）」

困難があってもそれを乗り越え何とか文化祭を開催したい、という思いは脈々と受け継がれてきているのでしょうか。新型コロナウイルス感染症の影響で、令和2年度には玲瓏祭中止の議論もありましたが、工夫を重ねて開催にこぎつけ、先輩達の熱い思いを途切れさせずに済みました。コロナを気にすることなく玲瓏祭を開催できる日が少しでも早くくることを願っております。なお、いつから「玲瓏祭」という名称になったのかについては、答えをまだ見つけることができていません。どなたか御教示いただければ幸いです。

（文責：校長 熊澤耕生）